



新春 春夏冬話（あきない話） ～指導法について思いを綴る～



在りし日の思ひ出

それは、つくば科学万博が開催されていた昭和の終わりの頃の話である。自分は、採用1年目で、県北部のとある中学校で1年生を担当していた。当時は、まだまだ中学校が荒れていた時代であった。新任の技量ゆえ、思うような学級経営ができずに悩んでいた。教室の生徒用ロッカーは、雑然とし、机や椅子もぐちゃぐちゃ…。日頃、口では言っていたが、子供たちには伝わっていなかった。

学年5学級であったが、朝一番に秘かに確認すると、周りの学級は、どこも整然としていた。入学式以降、同じスタートだったのに…。自分の無力さを感じていた。当時の自分がとった行動は、朝、早めに教室に行き、これまた、秘かにロッカーや机の整頓をしていた。今思うと、体裁だけを取り繕っていたのだ。ある朝、いつもと同じように、一人でこそこそと(?)机を整えていた。そして、ついに学年の副主任に見つかってしまった。仕方なく、事情を話した。その副主任曰く、「・・・なるほど、そうか・・・でも、担任が自分でやるのではなく、この状態を子供たちに示し、考えさせ、子供たちと一緒にやったほうがいいよ・・・」と。自分には、衝撃の一言だった。子供たちをうまく動かす自信もなかったし、せっかちな自分は、結果だけを求めている。今、振り返るとそのアドバイスは、ごくごく当たり前のことである。しかし、当時の余裕のない自分の頭の中にはでてこなかった。自分の、不勉強、自覚の無さを反省しきりである。これまで、誰にも話していなかった事をついに話してしまった。やっと心が楽になった。(笑) (by F・S)

指導方法の変化

箱根駅伝で往路、復路ともに制し、完全Vで2年ぶり8度目の頂点に立った駒沢大学の八木弘明監督(64)と10名の選手が1月4日、テレビに生出演した。

MCの加藤浩次さんが「ずっと指導にあたってこられましたけれど、指導方法ってどんどん変えてきましたか？」と聞くと、八木監督は「子供たちも少しずつ変わってきていますから、昔と今じゃ全然違います」と答えた。

加藤さんの「どう違いますか？」には「やっぱり我慢強さとか、厳しさとか、そういうものに耐えられるかっていうような」と答え、「何でもそうですけれど、人と話をしても、しっかり納得させて何事もやらせるということが大切。昔は、一方通行で指導しても、子供たちは何とか我慢しながらやっていたけど、今じゃ一方通行の指導は通じない。コミュニケーションをとってやらなくちゃいけなくなっている。選手たちを納得させるような指導の仕方にどんどん変えてきていますね」と話した。

一昔前は、厳しさを前面に押し出し、指導者が全てを取り仕切る指導方法が用いられた。例えば、『東洋の魔女』を育てた大松博文氏は、スパルタ指導が有名で女子バレーを東京オリンピックの金メダルに育て上げた。しかし、令和の今、この指導方法は通用するだろうか。

～ “やらせる” から “考えさせる” 指導へ 時代と共に変化していく

「企業戦士」のような根性論、精神論から「自分で考える」人間が求められる時代 ～

要するに従来の「上からの押し付け」による知識や技術の詰め込みから、「自分で知識や技術を習得する」ための「学ぶ力」「生きる力」を身に付けることが重要だ、という方向に日本の教育そのものが変化した。社会の変化によって求められる「人材」が変化したためである。

高度経済成長期、厳しく鍛えられたスポーツ選手は「企業戦士」として引く手あまただったが、今は、自分で課題を見つけ、自分で知識や技術を身に付ける人材が求められている。上からの指示で動くだけの人材はあまり重要視されていない。

部活も教育の一環だと思う。今は、選手が自分の意志で学び、努力をして技量を向上させることが大事だという考え方が主流になっている。八木監督が、「コミュニケーションを大事にして、子供たち(選手)を納得させることが重要」という内容の発言をしたことと同様だと感じた。

(by O・M)